

置せれな壁机座部鑑同  
かッてどににつ屋識・  
れトイがはうたの、同  
てテる貼、つ状隅搜・  
い！。ら古伏態に査書  
るプ机れいせの置を斎  
。、の、アに男かし、  
ア上レイな性れて深夜  
ナにトドつ、たい夜  
口はロルて背白る  
グ、なや死中い。  
時古飾映んを机  
計いり画で包で  
、ラ付のい丁は、  
駄ジけボるで、  
菓オがス。、刺椅子  
子、なタ、  
がカさ、  
、

とそに部を室マ  
鉛の座屋驅内ン  
筆横つの使でシ  
をで端しはヨン  
持は泣でて鑑ン  
つ、いは搜識・  
て木て、査、5  
、下い清をカ0  
座佳る畠進メ2  
つ奈。嶺めラ号  
て、い子てや室  
る。検紋指紋・  
い、8、  
る。、ノート  
、椅子

鑑識秀樹「いいえ。我々には何も  
引き続き頼む」

○  
秀樹　鑑識秀樹・同・書斎（深夜）  
　　鑑秀同  
　　「状況は？」  
　　「見ての通り、背後から包丁で刺され死亡しています。死亡推定時刻は昨晩10時ごろ。奥さんから通報がありま  
　　中止しのけています。」  
　　秀樹に気づき、近づく。  
　　「見つけた。」  
　　「その情報ト指紋は出でます。奥さんから発見されたので、害者の情報を確認します。」  
　　秀樹「奥さんから何か聞き出せた

鑑識 錦語正秀樹、書斎に入つて行く。



女性「古き良きものは、美しい」

○ 同・同・同（深夜）

秀樹 鉛筆も「彼女のものと同じじやないか？ この開きつぱなしと扉の向こうに見える佳奈を見る

秀樹「ホントですか？」  
鑑識B「佳奈を見る  
鑑識B「彼女ですか？」

秀樹「彼女だとしたら、簡単すぎないか？」  
鑑識B「ええ、でも」  
秀樹「もう一度、タブレットの映像を見る。」  
秀樹「指紋も残さずに見事な部屋の装飾。」  
秀樹「簡単なミス犯すか？」

鑑識 B 「鑑識 B 、タブレットを見ながら、動画を止め、仮面の女性の手の甲をアップにします。手の甲には、三角形のような形の配置にホクロがある。」

秀樹にタブレットを渡し、リビングに向かう。

秀樹、タブレットをアップを戻す。

リビングでは、鑑識 B 、佳奈に話しかけ

秀樹「秀樹、停止した動画を見て？」

鑑識 □ 仮面の女性の顔をアップにする。 □ 「大きな声で）警部！ やつぱりあると、ら、話は聞かず、さらには見えん瞳をアップする。すすみ佳奈の瞳には、包丁を持った嶺子